原著論文

スポーツ指導と暴力克服の倫理 ：他者としての選手との関係をめぐって¹

高 尾 尚 平（日本体育大学大学院）²

Abstract

This paper aims to show the ethical relationship between coach and player which respects the otherness of player and to explain exchanges between them required to overcome the violence in the relationship. This paper approaches the above objective in the following manner. First, based on the ideas of Levinas, this paper draws out the general framework of the ethical relationship between coach and player. Second, this paper examines what the roots of the violence in sport coaching are, and then searches for the situation that is requested to form the ethical relationship between coach and player. Finally, to realize an ethical relationship that does not result in the violence, this paper identifies what exchanges should be taking place between coach and player concretely. From the above, the following points are clarified: (1) An ethical relationship between coach and player is the relationship that coach desires the otherness of the player, not one in which the coach subsumes the otherness under his/her own comprehension. (2) This ethical relationship should be requested in the situation when the ego-ideal possessed by the coach is facing a crisis. (3) The ethic for overcoming violence is realized by the exchanges that player as a person speaks to coach, then coach puts the ego-ideal in question and seeks to a new path on sport coaching from receiving the language spoken by player. Therefore, according to this paper, what is called for overcoming the violence is the establishment of a relationship in which coach desires the language of player as the other, in the situation when coach's ego-ideal is facing a crisis.

Keywords: E. Levinas, language, gift, face, ego-ideal

キーワード：E. レヴィナス，ことば，贈与，顔，自我理想

¹ Sport Coaching and an Ethic for Overcoming the Violence: The Relation with Player as the Other

² Shohei TAKAO, Graduate School of Sport Science Nippon Sport Science University, 7-1-1 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo, 158-8508, Japan

1. 序論

1.1 はじめに

スポーツ指導に蔓延る暴力¹⁾を克服するためには、いかなる倫理が要請されるべきなのか。これは、本稿の中枢を成す問いである。

われわれは、法的に明文化された暴力の禁止²⁾を根拠に、暴力を振るう指導者を糾弾することができる。だが、暴力の不当性を唱えるのみでは、暴力を克服するための倫理を提唱したことにはならない。現に暴力が発生しているのは、法的に暴力が禁じられているはずの指導現場においてだからである。暴力の糾弾に満足するうちは、暴力の現実が覆い隠され、これを克服するための具体的思索の場も閉ざされる。法が暴力を禁ずる盤石な根拠であるなら、われわれの仕事は指導者が暴力と手を切るための倫理を構築することである。この点に、倫理が要請される所以がある。

久保によると、指導者の倫理とは「『コーチの正しい行為』およびその行為の『正しさの基準の探求』」³⁾である。この限りで指導者の倫理は、行為の正当性の基準によって計られる。具体的に竹村は、I. カントの行為論を援用しつつ、道徳的な善を基準とする実践的判断と目的－手段の必然性を基準とする理論的判断の観点から指導者による暴力について倫理的判断を下している⁴⁾。竹村は、指導者の暴力行為が実践的判断からして不当であるのみならず、理論的判断としても正当性を欠いていると主張する。その根拠は、暴力が道徳的な善を欠く行為だからであり、体罰や暴言といった暴力的手段が勝利という目的に適う行為にならないと判断されるためである。竹村にしたがえば、スポーツ指導における暴力は、善の観点から見て反道徳的であり勝利追求に対して非合理的であるゆえに、指導者の正しい行為にはなり得ないということになる。

竹村がいうように、指導者による暴力が反

道徳的行為であることは首肯できよう。指導者による暴力は、違法であるのみならず反道徳的な行為である。しかしながら、スポーツ指導における暴力の非合理性は、竹村が論じるほど自明ではないと思われる。後に詳述することとなるが、松田⁵⁾と高尾⁶⁾の研究からは、スポーツ指導の文脈では暴力でさえある種の機能や手段になり得てしまうことが明かされている。高尾は、「暴力の性質は、スポーツ指導の文脈において目的合理的な意味に転化される」⁷⁾といている。われわれが倫理を要請しようとしているのは、非合理的な暴力に拘泥し続ける指導現場というより、暴力の反道徳的合理性に指導者－選手間関係が蝕まれる指導現場なのである。そのため、行為の正当性を暴力克服の根拠とするのみでは、暴力の違法性と反道徳性を訴えるに留まり、暴力にすら目的合理的な意味が与えられてしまう指導者－選手間関係の問題が不問とされてしまう。坂本が「従来のように体罰の非教育性や反道徳性を訴えるだけでは、到底解決しえない問題なのである」⁸⁾と指摘するように、行為の正当性の倫理から暴力の反道徳性を糾弾することは、暴力を克服するために求められる具体的なプロセスを導き出すものではない⁹⁾。問われるべきは、いかにして指導者と選手の関係性のうちに合法性や道徳性が実現可能かである。「われわれは指導者が暴力の反道徳性を自覚しさえすれば、本来的な指導から逸脱した暴力など犯すはずがないといった幻想を抱いてはいられない」のである¹⁰⁾。

以上の検討より、暴力の克服を法や道徳性のみを求める倫理の限界がうかがえる。行為の正当性の倫理からは、暴力にすら意味や機能が与えられてしまう指導者－選手間関係の問題が見逃される。暴力が指導者と選手との間に存在する以上、これを乗り越えるための倫理も指導者と選手との間柄に照準を定める必要がある。「問題は、個人主義的倫理の欠如ではなく、間柄の倫理をどのように実践の場で発揮するかで

ある」¹¹⁾。

間柄の倫理とは、指導者－選手間の関係性のうちで実現されるものである。和辻によると、間柄の倫理とは「人々の間柄の道であり秩序であって、それがあるがゆえに間柄そのものが可能にせられる」¹²⁾ものである。暴力克服に要求される間柄の倫理は、暴力を発現させることなくスポーツ指導を可能ならしめる指導者－選手間関係の構築である。

間柄の倫理への言及は、教育哲学分野において丸山の議論に、スポーツ哲学の分野においてはE. レヴィナスの思索を参照した関根の議論に見受けられる。両者の議論の独自性は、他者としての生徒／選手との間柄のうちに教師／指導者の倫理を求める点にある。丸山は、「教師が主体となって子どもの学習過程をデザインし、制御するもの」¹³⁾と考える発想に暴力の根源を見定め、教師が「届きえていないかもしれない他者、理解しきれていないかもしれない他者」¹⁴⁾として子どもの他者性を汲み取るところに間柄の倫理を要請する。スポーツ指導の文脈において関根は、「スポーツの指導者のがわからみれば競技者は他者であるが、それはやはり弱きものかもしれない。ここに指導者の倫理がある」¹⁵⁾といている。関根によると、「尊重すべき『他者』とは、傷つきやすく壊れやすい生き物としての他者であり、常に生命を脅かされる身体」¹⁶⁾である。関根が論じる意味での指導者の倫理は、強き者として表象される競技者像のもとで覆い隠される儚い生き物としての競技者へ向けられている。両者が論ずる倫理で求められるのは、行為の正当性や合理性ではなく、生徒／選手の他者性の尊重である。行為の正当性の観点とは異なり、選手の他者性を主題とすることは、暴力の温床となっている指導者－選手の間柄に倫理性を求めることを可能にする。

とはいえ、当然ながら丸山の議論は、広義の教育場面を念頭に置くために、スポーツ指導の文脈においていかにして他者性の倫理が可能と

なるのかについては考察の対象としていない¹⁷⁾。また関根の議論の中心はフェアネスやオリンピックの平和における他者の倫理であるために、彼の指摘からは、指導者－選手間関係におけるどのような他者性の尊重が暴力克服を可能にするのかについてはうかがい知れない。他者性の倫理から暴力の克服を目指す試みは、従前の議論において未だ着手されていない課題である。ここに、行為の正当性の倫理とは違う仕方で暴力克服に向かう倫理の端緒がある。

1.2 本稿の目的と方法

本稿が暴力の克服へ向け探究するのは、暴力行為の倫理的判断についてではなく、指導者と選手との非暴力的関係を構想する間柄の倫理についてである。この試みは、他者としての選手に対する指導者の倫理を解き明かすこととして遂行される。本稿では、選手の他者性を尊重した指導者－選手間の倫理的関係がいかなるものであるのかを示し、この倫理的関係において暴力克服を可能にするためには具体的にどのような指導者－選手間のやり取りが求められるのかを明らかにする。

本稿では、次の手続きから上記の課題にアプローチする。まず、レヴィナスの思索¹⁸⁾から、指導者－選手間の倫理的関係の大枠を素描する。本稿がレヴィナスの思索に議論の骨格を求める理由は、彼の射程が他者との倫理的関係の究明に向けられているからであり、その倫理的関係の構築によって目指されるものが暴力の克服だからである。次に、レヴィナスの思索を本稿が主題とする指導者の暴力問題に接続するための基礎的考察を行う。ここでは、スポーツ指導と暴力との根源的な結びつきが検討され、指導者－選手間関係において他者性の倫理が要請される所在が示される。最終的に本稿では、暴力を発現させることのない倫理的関係を実現するためには、具体的にどのようなやり取りが指導者－選手間関係のうちに交わされるべきかを

明示する。

2. レヴィナスにおける他者性の倫理

2.1 全体性の暴力性

レヴィナスの哲学は、徹底した暴力への抵抗として紡ぎ出される。その根底には、20世紀にユダヤ人を包囲した暴力の経験が横たわっている。『全体性と無限』の翻訳を務めた熊野は、次のようにレヴィナスを紹介する。

レヴィナスは、ユダヤ人の歴史的苦難を背景にして、暴力の超克へと向かう思考を紡いだ哲学者なのである。レヴィナスは、暴力と殺戮が蔓延し、人間性が文字どおり焼きつくされる世界のなかで、主体と他者の回復に向けた、遥かな希望を手繰りよせようとした思索者であった¹⁹⁾。

レヴィナスの念頭にある暴力は、現実的な位相においては、ファシズムや戦争の暴力である。とはいえ、彼は単に反戦争論を語っているのではない。レヴィナスが根本的な異議を申し立てるのは、伝統的な西洋哲学の体系に潜む暴力性である。レヴィナスにとって、彼が経験した現実的な位相における暴力と哲学の体系に潜む暴力性は地続きである。

戦争において存在が示すことになる様相を劃定するのが、全体性 (totalité) という概念である。西洋哲学はこの全体性の概念によって支配されている。西洋哲学にあつて、個体はさまざまな力のにない手に還元される²⁰⁾。

レヴィナスにとって全体性とは、「＜他＞ (Autre) を＜同＞ (Même) に還元することである」²¹⁾。戦争において個々人は、政治的目的のもとに役割を与えられ整序される。戦火のもとで個々人は、これと無関係であることができない。戦争の全体性は、このように捉えられる。

概念的に見れば全体性は、主体が対象に対して意味を与えることであり、個別の存在者を1つの概念のもとに収斂することである²²⁾。まさにこれらは、伝統的な哲学の認識論や存在論の考え方そのものである。レヴィナスにとっては、全体性の概念が西洋哲学の伝統を形容しており、この全体性こそが暴力性である²³⁾。佐藤によると、レヴィナスが批判の矛先を集中させるものは、「西洋哲学に特徴的な二つの傾向、つまり認識する主観を絶対化する態度と、非人格的な全体性の立場に立とうとする態度」²⁴⁾にほかならない。

レヴィナスが指摘する全体性は、われわれが生において陥りがちな態度を示している。われわれは、対象を一方的に意味づけすることで認識するし、なにかしらの概念を媒介にして世界を捉える。指導者は、選手が正しい道程を歩んでいるか、勝利のためにいまなにを施すべきなのかといった事柄を判断し、選手をどこかしらの地点へと導こうとする。レヴィナスは、こうした態度に暴力の匂いを嗅ぎつける。そこには、「正しい道程」や「勝利のために」といった認識や概念のうちに選手を収斂しようとする暴力性がある。つまり、＜他＞としての選手を指導者が有する＜同＞へと還元する、所有の暴力性がある²⁵⁾。スポーツ指導の理念の正しさが、暴力と非暴力を分かつのではない。この理念のもとに選手を収斂するところに、暴力性は既に根を張ってしまっている。

2.2 倫理的關係＝形而上学的關係

レヴィナスの議論では、全体性の暴力性といかに手を切るのかが倫理的課題として設定されている。この課題は、いかにして全体性の網目のなかに他者を包囲することなく、倫理的關係を取り結ぶことができるのかという点に方向づけられる。レヴィナスは、全体性の断絶に暴力の克服を求める。

レヴィナスにとって他者との倫理的關係は、

「他者を理解する」とか「他者のために行為する」といった仕方ではあり得ない。あくまで他者理解は、自己が他者を所有することであり、自己を起点としながら行われる²⁶⁾。理解 (compréhension) は、＜同＞(自己)のうちに＜他＞(他者)を包摂する全体性である。われわれは、選手との倫理的関係として「選手の頑張りを認める」とか「指導者のエゴではなく選手のために想って行為する」といった関係を想起しがちである。だが、レヴィナスにとってこうした関係は、なおも全体性の運動のなかに位置づけられる。確かに、指導者が暴力に手を染めるのは、選手を理解し選手のために想って行為するときなのかもしれない²⁷⁾。レヴィナスの倫理学に立脚すれば、「選手の理解」や「選手のため」といった認識の圏内では、暴力の克服は見込まれない。

それゆえ、レヴィナスにとって倫理的関係は、他者理解の次元では成就されない。レヴィナスがいう倫理的関係は、経験認識に還元されない形而上学的位相において達成される。

＜他者＞(Autrui)の異邦性——《私》に、私の思考と所有に＜他者＞が還元されえないということ——が、まさに私の自発性 (spontanéité) が問いただされることとして、倫理として成就される²⁸⁾。

他者の異邦性とは、理解や認識といった＜同＞に還元され得ない他者の他者性である。異邦な他者の現前は、＜同＞の自発的な理解や認識を問いただす。レヴィナスにとって倫理は、他者がまさしく異邦な他者として現前することにより、自己の側が受動的に問いただされることで成就するものである。

そのため、倫理的関係において他者は、自己の理解のうちに還元され尽くすものではない。むしろ、他者は自己の理解の範疇を超えている。レヴィナスにとっては、こうした他者との関係が倫理である。他者との倫理的関係は、

理解に還元されることのない形而上学的な渴望の関係として表現される。レヴィナスは、「形而上学的な渴望 (Le désir métaphysique) は、(中略) まったく他なるもの (tout autre chose) を目ざし、絶対的に他なるもの (l'absolument Autre) に向けられているのである」²⁹⁾ といっている。「絶対的に＜他なるもの＞とは＜他者＞である」³⁰⁾。レヴィナスの議論では、絶対的に他なるものとしての他者を渴望する関係こそが倫理的とされる。つまり、レヴィナスにとって「＜他者＞は、対象化されたり、認識されたり、あるいは主題化されることを拒む『絶対的他者性』であって、このようなものとしての人間との関係こそが『倫理的関係』だとされる」³¹⁾。倫理的関係においては、他者を理解できることが重要なのではなく、むしろ、他者が理解不可能であることのほうが重要なのである。

したがって、先に例示した「選手の理解」や「選手のため」といったときの選手は、全き意味での絶対的他者ではない。この場合の選手は、指導者によって「指導の対象」、あるいは「成長すべき者」といった認識のもとに意味を付与された存在である。この限りで選手の他者性は、指導者の認識によって剥奪されてしまっている。選手との倫理的関係は、一方的に指導者が選手を対象化して捉える思考——すなわち全体性——の外部で取り結ばれる。このとき、絶対的に他なるものとしての選手と倫理的関係が取り結ばれることとなる。

2.3 無限なものとしての選手の他者性

では、絶対的に他なるものとしての他者とはいかなるものであるのか。絶対的に他なるものとしての他者は、いかなる位相において現れるのか。

レヴィナスの議論において絶対的に他なるものとしての他者は、無限なもの (l'infini) として換言される。他者とは、無限なものである³²⁾。無限なものとは、「観念だけが私のうちにあり、

しかもそれ自体は観念から無限に遠ざかるような、ただひとつの観念されたものである」³³⁾。レヴィナスによると、「無限の観念とは、思考されるより以上のことを思考すること」³⁴⁾である。

レヴィナスがいう無限なものの観念には、R. デカルトにおける神の位相が念頭に置かれている。レヴィナスがデカルトの議論から借り入れるのは、神（無限なもの）の分離された超越性であり、神（無限なもの）の捕捉不可能性である。レヴィナスは、次のようにいっている。

デカルトによれば、「私は考える (je pense)」は、どのようにしてもそれが内包することができず、じぶんがそこから分離されている＜無限なもの＞と、関係を取りむすぶ。その関係が「無限なものについての観念」と呼ばれるのである³⁵⁾。

レヴィナスがデカルトを引きつつ指摘するのは、不完全な人間（有限なもの）と完全な神（無限なもの）との不均衡であり、超え難い隔たりである³⁶⁾。人間（有限なもの）は、完全な神（無限なもの）を思考してしまっている時点で不完全であり完全から遠ざかってゆく。レヴィナスにとって、「考える私」（有限なもの）は神（無限なもの）と同等ではない。神（無限なもの）は、「考える私」（有限なもの）から無限に隔てられてゆく。無限なものは、有限なものの思考から常に溢れ出てしまう。けれども、われわれはそういったもの（無限なもの、完全なもの、絶対的なもの）があるという観念を抱くことならば可能である。それゆえに他者は、自己が理解するものではなく渴望するものとされる³⁷⁾。渴望は、決して自己の理解の枠組みのうちに捕捉され尽くすことのない他者へと向けられるものである³⁸⁾。他者とは、自己の思考において捕捉不可能でありながら、それを追い求めることのみ可能となるようなものである。一方、既述の通り自己の思考のうちに包摂される

他者は、全体性に取り込まれてしまい、結局のところ＜同＞に還元される対象である。

レヴィナスの議論では、無限なものをめぐる自己との関係の仕方が暴力と倫理を分かち、すなわち、無限なものとしての他者の他者性を暴力的に削ぎ落した形で自己の理解の枠組みに収斂するのか、無限なものとしての他者の他者性を自らが渴望するののかという分岐点である。われわれは、自己にとって理解不可能な選手の態度や挙動に対して、暴力的になにかしらのレッテルを貼ってしまっていないだろうか。指導者は、選手の理解不可能性に対して暴力を行使してしまっていないだろうか。おそらく、自身にとって理解不可能な選手の他者性は、われわれにとってわからないものであるがゆえに理解可能な形式へと還元したくなるのであろう。例えば、「怠惰で訓育されるべき部員」といった具合にである。だが、まさにこの点にこそ、暴力性が存する。レヴィナスに倣えば、指導者にとって理解し得ないような選手の態度や挙動にこそ絶対的な選手の他者性があり、これを自己の理解の枠組みのうちに暴力的に収斂するのではなく渴望し続けるような間柄が指導者と選手の倫理的関係において求められる。

では、こうした倫理的関係は、指導者－選手間の関係においていかにして可能となるのか。最終的にこの点を具体化すべく、次章では、現にわれわれが直面している指導者の暴力がどのような根源から発現する問題であるのかを検討してゆく。この作業によって、スポーツ指導に蔓延る全体性と指導者－選手間関係のうちに倫理が要請される所在を探索する。

3. 指導者による暴力とスポーツ指導における暴力性

3.1 指導者による暴力と全体性

指導者による暴力もまた、レヴィナスがいう全体性（暴力性）の運動のなかで生じている

ように思われる。指導者の暴力について原理的に考究した松田と高尾の研究からは、指導者による暴力と全体性との密接な関係を理解することができる。

松田の研究において指導者の暴力は、「いい選手」という規範から逸脱した選手の反省性を強化する規格化のための制裁として論じられる³⁹⁾。松田が指摘する指導者の暴力は、選手を「いい選手」という規範へ収斂するための手段になり得てしまうものである。彼が論じる意味での暴力は、選手を「いい選手」という理念型へ包摂する全体性の機能として考えることができる。「いい選手」という理念型はまさしく＜同＞の雛型であり、指図された理念型へ選手を規格化することは全体性にほかならないからである。

一方、高尾は、松田の指摘とは異なる暴力の様相を提示している。高尾は、指導者による暴力が、選手のうちに既存の認識や習慣を打ち碎き、彼／彼女らを超越させるための手段になり得ることを究明している⁴⁰⁾。高尾が主張する暴力は、死に起因する恐怖を指導者が選手に経験させることにより、スポーツの局面のなかで陥とられや思い込みから彼／彼女らを解き放とうとするものである。一見すると、高尾が指摘する指導者の暴力は、選手を＜同＞のうちに包摂する類のものではないように思われる。しかしながら、指導者が選手を超越へ導こうとするとき、「超越すべき者」として選手を見做す対象化が生じている。「選手の超越のため」と称して暴力を振るうことには、「超越できていない選手」という選手理解が含まれており、この理解の前提には「超越したほうがよい」という暗黙の理念が指導者の側に存在する。あくまで「選手のため」とは、選手を部分的に否定することであり、且つ、理念という＜同＞の枠組みのうちで選手を所有することなのである⁴¹⁾。

彼らは、それぞれの観点から暴力について論じているにせよ、いずれの議論においても指導者による暴力が全体性を形作ることを示して

いる。指導者の暴力は、他動詞的に選手を規格化や超越へ向かわしめる全体性の機能である。そして、指導者による暴力の行使には、選手を規格化や超越の対象として見做す＜同＞の認識や判断が前提とされている。

こうした暴力と全体性との結びつきは、単なる理論的想定に留まるものではない。体罰事件の判例を分析した村本の研究からは、「熱中症の症状を訴え休憩を求める生徒に対して、指導者が生徒は怠けようとしていると決めつけるという事案」⁴²⁾や「生徒の怠慢なプレーが見られた場合に体罰を行っている事案」⁴³⁾などが報告されている⁴⁴⁾。まさにこれらは、生徒の様態を「怠けようとしている」といった＜同＞の理解のうちに収斂し、怠慢を怠慢ではない一定の状態へと整序しようとする全体性の暴力である。また、運動部活動にてフィールドワークを行った庄形は、当該部活動の顧問教員が抱く体罰に対する認識を次のようにまとめている。庄形は、「顧問教員は体罰について、ない方が良いが、試合の厳しさを克服するためには必要であるとも考えている」⁴⁵⁾と報告している。庄形の報告からは、「試合の厳しさを克服する」という理念のもとに、指導者が暴力に機能を見出す実相の一端をうかがい知ることができる。具体的な相においては、こうした全体性の暴力がスポーツ指導のうちに看取される。

以上の検討からは、指導者による暴力と全体性との密接な結びつきが確認される。指導者が暴力に手を染めるとき、＜他＞としての選手を＜同＞へ収斂しようとする全体性が前提とされている。指導者の暴力は、全体性の機能として作動する。暴力を克服するためには、全体性との断絶が求められる。

3.2 スポーツ指導における＜同＞の必然性

とはいえ、指導者による暴力が全体性の暴力であったとしても、直ちにこの全体性の一切を否定しスポーツ指導から取り除くことは困難

であると思われる。というのも、スポーツ指導という営みそれ自体が全体性を含み持つと考えることができるためである。

内山によると、指導者の本質は、選手の「身体全体の向け変え」⁴⁶⁾を遂行するところにある。具体的に内山は、指導者による選手への働きかけについて次のように述べる。

「勝利」という目標を実現するためにも、この「先に進む」には、競技者と不断のせめぎ合いの中で、コーチは何はともあれ当該種目に固有の「特殊性への馴致」を果たした上で、そのレベルから一層進化・発展させた新たな身体諸能力の顕現化を図るべく「更なる高度化を目指した現状からの超脱」を推し進めねばならないのである⁴⁷⁾。

この引用によるとスポーツ指導とは、当該種目に特有な運動形式を選手に習得させ、そこからより発展した身体諸能力の顕現化へ選手を導くことを不断に繰り返すことにより、勝利を目指してゆく営みである。スポーツ指導に関するこうした理解は、別段、特異なものではないだろう。佐藤によれば、指導における「『より優れた選手の育成』という課題は、(中略)『技術的課題』である」⁴⁸⁾。選手を特定の運動形式へ導き入れることなく、選手を目標地点へ導こうとすることなく遂行されるスポーツ指導を想起することは困難である。

それゆえ、概念的に見ればスポーツ指導は全体性の運動である。スポーツ指導は、勝利という最大の目標に向け、馴致や超脱といった目的の連関へ選手を収束してゆくという意味において全体性を形作る。あるいは、スポーツ指導を技術的課題と捉えた時点で、〈他〉を〈同〉に還元する全体性が発見される。「技術は対象をあるがままにしておかないで、あるべきように変えようとする」⁴⁹⁾のである。

以上の議論からわれわれが受け止めるべき

は、スポーツ指導という営みそれ自体が暴力性(全体性)を包含しているという原理である。スポーツ指導は、「個別的・具体的暴力を現象させるようなある人間的・社会的状況」⁵⁰⁾たる暴力性のうえで遂行される営みである。スポーツ指導という本来的に暴力と無縁な営みがあって、これと異なる地平から暴力が生じてくるのではない。スポーツ指導という営みそのもののうちに、暴力の本質的契機が存する。つまり、スポーツ指導という暴力性の地盤のうえに、選手を規格化や超越へ向かわしめる具体的な暴力が発現するのである。われわれは、こうした認識から暴力の克服へ向かうための思索を展開しなければならない。

3.3 スポーツ指導の暴力性と指導者の暴力の狭間：他者性の倫理の所在

スポーツ指導は暴力性を含み持つ。指導者による暴力は、選手を規格化や超越へ向かわしめる全体性の機能である。前節までにわれわれが達したのは、このような認識である。

それゆえ、スポーツ指導という行為そのものの正当性や内容を問題にするのみでは、依然として選手の他者性は担保されないものであり暴力の可能性を残存させ続ける。反対に、スポーツ指導の暴力性(全体性)の一切を抹消しようと努めれば、その帰結はスポーツ指導の放棄へ向かうこととなる。このことは、本稿がはじめに示した行為の正当性の倫理の限界を裏づけるものであろう。スポーツ指導の内容の良し悪しを問題にするのみでは、暴力を克服するための倫理は導出されないのである。

問題は、スポーツ指導の暴力性が、指導者－選手間関係において具体的な暴力の行使へ転化する一線である。ちょうど拳銃を手にした途端、可能的に殺人の機会が与えられてしまうように、スポーツ指導という営みは暴力性を含み持っている。しかし、実際に銃口を他者に向け発砲するか否かは、どのような局面で他者と対

峙しているのかに拠っている。スポーツ指導が暴力性を包含するにしても、指導者が暴力に手を染めないことは可能なはずである。暴力克服へ向けた他者性の倫理は、スポーツ指導という行為の内容ではなく、選手との関係性のうちにある指導者に要請される。

では、選手との関係性における暴力の引き金はいかなるところにあるのか。この一線は、客観的に定義可能なものではないし、各具体的事例から抽出するの也不適切である。というのも、指導者による暴力の行使には、選手との関係に基づく心的な要因が作用しているからである。松田は、指導者が暴力に手を染める心的なメカニズムを次のように論じる。

（指導者の：引用者注）膨れ上がった自我理想は、バランスを崩さぬよう、どんな些細な危険からも守らなければならない。指導の行き詰まり、成績不振などは、自我理想への批判である。このとき、指導者は体罰を行い、選手らの自我を痛みつける。それは、選手達からの「ほれこみ」を維持するための技法である⁵¹⁾。

ここで松田が論じる自我理想とは、選手との関係性によって担保される、指導者自身が抱く「良い指導者」像を意味する⁵²⁾。レヴィナスの文脈でいえば、まさに自我理想は、指導者自身が抱く＜同＞の理想像である。なぜなら、「良い指導者」像としての自我理想は、指導者が抱く理想像を選手が現実化し、選手からの「ほれこみ」を指導者が享受する限りにおいて満たされるものだからである⁵³⁾。指導者にとっての自我理想の実現には、＜他＞としての選手を＜同＞と化する作用が前提とされている。

松田の指摘からうかがい知ることができるのは、指導者は自身の自我理想が選手との関係性において危機に瀕するとき、暴力を行使するということである。なお、ここで注意すべきは、

自我理想が素朴に否定されるべきものではないということである⁵⁴⁾。自我理想は、指導者が選手をどこへ導こうとするのか、あるいはどのように選手にアプローチしていくのかを方向づけるものでもある。暴力の引き金は、自我理想という存在そのものではなく、選手との関係において危機に瀕した自我理想である。指導者は、自身の理想像である＜同＞の存続が＜他＞としての選手によって脅かされるとき、自我理想の全体性に選手を取り込むべく暴力を行使するのである。暴力の引き金は、指導者の自我理想から逃れ出ようとし、これを脅かす選手の存在に指導者が遭遇する局面である。スポーツ指導の暴力性が具体的な暴力へと顕現化する一線は、この局面に見出される。暴力の克服に向け他者性の倫理が要請されるのは、選手との関係において指導者が有する自我理想が危機に瀕する局面である。

4. 暴力の克服に向けた他者性の倫理

4.1 指導者－選手間の倫理的関係：顔の表出

前章の検討からは、指導者が自我理想から逃れ出ようとする選手の他者性を＜同＞へと還元しようとするとき、暴力を行使することが示された。指導者にとって他者性の倫理が要請されるのは、自身の自我理想の限界地点においてである。では、自我理想から逃れゆく選手を前にして、指導者が暴力に手を染めることなく選手と倫理的関係を取り結ぶためには、具体的にどのようなやり取りが指導者－選手間で交わされる必要があるのか。本章が暴力の克服へ向け究明するのは、この点についてである。

レヴィナスによると、他者を渴望するような倫理的関係は、「私が所有している世界を＜他者＞に贈与すること（don）が可能であること、言い換えるなら向かい合った顔（visage）が現前することとして生起する」⁵⁵⁾。他者との倫理的関係は、自己が有する＜同＞の認識を他者に

贈与することであり、この贈与は他者の顔が現前することによって可能になる。このことを理解するためには、まずレヴィナスが論じる意味での顔がいかなるものであるのかをおさえておかなければならない。

レヴィナスの議論において顔は、特殊な位置を占めている。彼が顔という語を用いるとき、それは単に身体の一部を指しているのではない。顔は、対象化されることのない他者がそれ自体で現前する仕方を形容している⁵⁶⁾。レヴィナスによると、「顔において＜他者＞が、絶対的に他なるものが現前する」⁵⁷⁾。ラジオ放送にて展開されたフィリップ・ネモとの対談の際、レヴィナスは顔について次のように咀嚼している。

顔は意味作用であり、しかも、^{コンテキスト}文脈のない意味作用です。つまり、他人はその顔の公正さにおいては、ある文脈のなかにあるひとりの人物ではない、ということです⁵⁸⁾。

顔は、自己によって対象化されるのではない他者の現前であって、意味や役割を与えられた存在ではない。顔は、＜同＞による対象化を免れる倫理的抵抗として描き出される。とはいえ、顔の現前は強者による毅然とした抵抗ではない。レヴィナスは、「この倫理的抵抗が私のさまざまな権能を麻痺させ、無防備な眼の奥底から、顔の裸形 (nudité) と悲惨 (misère) とにおいて堅固で絶対的なものとしてあらわれる」⁵⁹⁾ といっている。顔は意味や役割といった防備を剥いだ裸形であるがゆえに、その様相は無防備さや悲惨さといった脆さを呈する。レヴィナスにとって他者は、＜同＞の地盤から溢れ出す顔の無防備さにおいて表出する。

選手は選手である限りにおいて、なにかしらの役割を担い、どこかしらの目標へ向かいながら存在していると思われる。選手は、フォワードポジションを任される人物であったり、身を粉にして勝利を追求する人物であったりする。

あるいは、規範を大切にする、よきチームメイトであつたりもするだろう。これらは、選手としての彼／彼女らの存在意義を保証する防備である。スポーツの世界は、防備を纏う選手たちによって織り成されている。けれども、「世界の組成のなかでは＜他者＞はほとんど無にひとしい」⁶⁰⁾。レヴィナスがいう顔とは、世界の組成のうちで覆い隠され、選手という防備の奥に退けられたその人としてのその人である⁶¹⁾。その姿は、「寒さや飢えや渴きをおぼえ、はだかであり、避難場所を探す」⁶²⁾ 悲惨なものであるのかもしれない。顔としての選手⁶³⁾ は、筋肉の痛みに苛まれ、孤独に恐怖する脆い生き物であるのかもしれない。本当のところはわからない。顔としての選手の姿を定義しようとする試みは、ロゴスによってその他者性を覆い隠すことに帰着してしまう。文面のうえでわれわれが論じ得るのは、顔が世界の組成のなかで覆い隠されていたなにほどかとして表出するということである。その人としてのその人は、チームでの役割や存在意義の彼方から、一切のロゴスの彼方から到来する。顔としての選手は、「成長すべき者」の逞しさとして表象されるのではなく、スポーツの局面のなかで方位を失った無防備さにおいて表出するのである。

この意味で、指導者の自我理想に符合し得ない選手の姿は、可能的には顔の現前である。自我理想の限界は、＜同＞の認識の圏外にある＜他＞の到来を可能的に示唆するからである。しかし、ここで可能的と付言しなければならない訳は、指導者が自我理想の限界地点に現れる選手の脆さを、「怠慢」や「不真面目」、「生意気」といった具合に対象化し、暴力によって自我理想の実現に邁進し続けることもあり得るからである。顔との関係は、一方的に選手の表情や振る舞いを見るのでは不十分である。

顔との関係は、顔の語りによって成就する。「語り (discours) とは意味の産出である」⁶⁴⁾。「意味しながら現前することこそが、ことばを語る

ということ」⁶⁵⁾である。レヴィナスがこのように述べるのは、顔においてことばを語る他者が、対象化され過去に沈み込んだ自己を常に撤回しながら現前するからである。確かにわれわれは、他者の行動を視覚で捉え他者の思考や感情、状態などを推し量ることがある。だが、このことはなおも＜同＞の理解に留まる。「ふるまいから出発してその人物を再構成することは、すでに獲得された私たちの知のはたらきによるものにすぎない」⁶⁶⁾。「怠慢」や「不真面目」、「生意気」といった選手の表象は、あくまで指導者の自我理想を基軸として捉えられる選手の姿である。指導者の視覚によって捉えられる選手は、指導者の自我理想のもとで無限なものとしての他者性を剥奪され、「怠慢なプレー」や「不真面目な練習態度」といった理解の雛型のうちで非人格化される。かくして、顔としての選手の姿は、指導者の自我理想のうちで覆い隠されることとなる。一方、「語る者はじぶんが語る^{パロール}ことばに人格として現前」⁶⁷⁾する。顔が語ることばは、現在的に意味を産出する。ことばを語る他者は、＜同＞によって意味を与えられるのではなく、自ら意味しながら一箇の人格として現前する。「^{パロール}ことばを語ることは視覚を拒絶する」⁶⁸⁾ものとなる。顔としての選手は、自らことばを語ることによって現前する。

したがって、レヴィナスが他者との倫理的関係の条件として掲げる「向かい合った顔が現前すること」は、顔の脆さにおいて現前する他者のことばによって可能となる。指導者は自我理想に適合し得ない選手との直面に際して、選手のプレーや振る舞いのみから彼／彼女らになんらかの烙印を押してはならない。そうしたくなる局面で顔としての選手が語ることばに耳を澄ますのである。すなわち、指導者が自我理想の枠組みから選手へ意味を付与するのではなく、選手がことばによって産出する意味を指導者が受け取るのである。自我理想からの逸脱者としてではなく、ことばを語る一箇の人格とし

ての他者との交わりが、選手と倫理的関係を結ぶうえでの前提条件となる。

4.2 指導者－選手間の倫理的関係：指導者によることばの贈与

こうした語りの関係は、誤って理解されてはならない。語りの関係は、選手を説得したりどこかしらへ誘導するための問答のようなものではない。レヴィナスにとってこうした関係は、暴力的に他者の自由を買収しようとする不正(injustice)である⁶⁹⁾。語りの関係は、以下のように理解されなければならない。

語りにおいて＜他者＞に近づくとは、＜他者＞の表出(expression)を迎え入れることである。＜他者＞はその表出にあつて、思考(pensée)が＜他者＞から奪いとってきた観念を一瞬一瞬あふれ出してゆく。そのように＜他者＞に近づくことは、したがって、《私》の容量を超えて＜他者＞を受け入れることである⁷⁰⁾。

語りの関係においては、自己が他者を＜同＞へ導き入れるのではなく、指導者が有する自我理想を超えて他者を迎え入れるのである。それゆえ、レヴィナスにとって他者が語ることばは、自己の観念を問いただす師の教え(enseignement magistrale)として解される⁷¹⁾。レヴィナスにしたがえば、選手のことばによって問い直されるべきは、指導者の自我理想である。語りにあつて指導者と選手の関係性には、教わる者と教える者の逆転が生じる。指導者(教わる者)が選手(教える者)の他者性を渴望するのである。

選手の他者性を渴望する語りの関係は、指導者の側からすれば贈与という様相を帯びるものである。ここで贈与とは、他者の現前によって「私による世界の悦ばしき所有」⁷²⁾を廃棄することである。レヴィナスが語りと贈与を結びつけるのは、「ことばという関係では、超越が、

根本的な分離が、対話者たちはたがいに異邦人であることが、私に対する〈他者〉の啓示が前提されているからである」⁷³⁾。このことの話については、一層の検討を要すると思われる。

既に見てきたように、レヴィナスが問題視する〈同〉の暴力性は、概念や認識といった普遍的な地盤のもとに諸存在を収斂してしまう全体性であった。〈同〉の圏内においては、理念化された平和や正義、確たる認識の地盤としての自己といった普遍的なものがまず前提とされ、そのもとで世界が把握される。普遍性や理念性を前提とする世界との関わりかたは、最終的に〈同〉を満たすことが目論まれた交換にほかならない。「ことばでいってもわからないから殴るしかない」という旨の指導者のいい分は、交換の最たる例である。交換においては、指導者の側が是とすべき理念を所有していることになっており、選手は予め設定された理念に収斂されるべき対象として見做されている。交換においてことばは、〈他〉を〈同〉へ回収するための賄賂となる。「ことばでいってもわからない」とは、賄賂としてのことばの働きへの疑心であり、〈同〉への返礼を納めてくれない選手への不満である。

これに対し、顔に向けて語り出されることばは全く逆の働きをする。顔へのことばは、対話者が共通の理念性のもとにはない異邦な他者であることを前提としている。顔にことばを語ることは既に、選手を他者として承認している。レヴィナスによると、「ことばは普遍性と一般性を前提とするどころか、その両者をはじめて可能にするものである」^{74) 75)}。倫理の関係においては、選手との対話によって初めて普遍性が創られるのであって、普遍性のもとに選手との関係が従属するのではない。ことばが交わされる場合は、もはや指導者が自我理想のもとに選手を所有する世界を超えている。「語られる世界は、私が贈与する世界」⁷⁶⁾である。レヴィナスは、次のようにいっている。

他者を承認するとは、したがって、所有された事物の世界を突きぬけて他者に到達することであるが、他方それは同時に、贈与によって共通性 (la communauté) と普遍性 (l'universalité) を創設することである。(中略) ことばを語ることは世界を共通なものとするものであり、共通の場をつくり出すことである⁷⁷⁾。

語りの関係においては、選手が〈同〉によって所有不可能な他者であることが承認されており、贈与としてのことばによって初めて共通性や普遍性が創出される。レヴィナスのことばを迎え入れるなら、われわれは次のように指導者－選手の間柄を問い直すことができる。すなわち、自我理想の危機に瀕する指導者が、暴力によって自我理想を満たすことに充進するのではなく、贈与としてのことばから新たな活路を創設してゆく間柄である。

確かに、スポーツ指導は暴力性を包含している。指導者の自我理想の危機は、具体的な暴力への引き金となる。あくまで、危機に瀕した自我理想を満たそうとするのなら、指導者が見出す活路は暴力なのである。だが、自我理想の不可能性は、同時に顔において選手が語ることばの必要性を告げている。「ことばが語られるのは、関係の諸項のあいだに共通性が欠けているところにおいてであり、共通平面が欠けており、共通平面がはじめてかたちづけられなければならない場所においてなのである」⁷⁸⁾。ここで指導者は、自身の自我理想に選手を従わせるのではなく、一箇の人格としての選手のことばに教えを乞い、そこにおいて交わされる語りから共通平面を創設するのである⁷⁹⁾。指導者が暴力に手を染めることなく選手との間柄を取り結ぶための倫理は、自我理想の危機に瀕した指導者が、選手へことばを贈与し、他者としての選手のことばによって自我理想を問い直し、交わされた語りから新たな活路を創設するところに求められる。

5. 結論

指導者による暴力が、反道徳的且つ違法な行為であることはいうまでもない。けれども、暴力は指導現場に存在する。暴力は、行為の反道徳性や違法性を踏み越えて、指導者と選手の間柄に発現する。暴力を克服するためには、あるいは、スポーツ指導の道徳性や合法性を実現するためには、暴力の温床となる指導者－選手間関係が問い直されなければならない。

本稿はこのような問題意識に基づき、暴力行為の不当性を訴えることに終始するのではなく、指導者と選手の関係性のうちで非暴力を可能ならしめるための間柄の倫理について論究した。本稿は、暴力の克服を主題とするレヴィナスの他者論を導き手としつつ、指導者が暴力に手を染めることなく選手との倫理的関係を取り結ぶためには、具体的にどのようなやり取りが指導者－選手間で交わされる必要があるのかを問うものであった。この問いに対して本稿が導き出す結論は、以下のようにまとめられる。

スポーツ指導における暴力を克服するための倫理的関係は、指導者が選手の他者性を渴望する間柄によって成就する。この倫理的関係は、自我理想の危機に面した指導者が、他者としての選手のことばから自身の指導を問い直すことによって具体化される。暴力の克服へ向け求められる指導者－選手間のやり取りは、指導上の障壁に面した指導者が選手へことばを贈与し、一箇の人格としての選手が指導者へことばを語り、こうして交わされる語りから新たな活路を創設してゆくような相互行為である。

それゆえ、本稿が提示する倫理は、指導者個人の内省のみでは成就し得ないものである。「倫理的関係によって＜私＞は問いただされる。このような問いただしは他者から開始されるのである」⁸⁰⁾。倫理的関係は、指導に際して日常的に顔を合わせる他者としての選手から始まる。

暴力を行使する指導者として、選手のために

想いスポーツ指導に携わっていると思われる。だが、その努力とは裏腹に指導者の思惑に適合し得ない選手も存在する。スポーツ指導に熱心な指導者ほど、こうした選手の存在は目に余るものとなるのだろう。指導者の導きから逃れゆく選手との直面は、暴力の引き金となる。指導者は、危機に瀕した自我理想を満たすべく選手に暴力を行使するのである。一方、指導者の自我理想の限界は、選手が語ることばを必要とする場面でもある。暴力の可能性は、指導者の独我的なスポーツ指導の不可能性を告げている。選手の理解不可能性に面して指導者は、選手が語ることばに耳を澄ますことによって自己を問い直すことができる。指導者の自我理想の危機は、暴力と非暴力を分かち分岐点である。指導者の熱心さは、自身が抱く理想像に選手に従事させる強圧によってではなく、自身の思惑から逃れゆく選手のことばに教えを乞う誠実さにおいて体现されるべきであろう。暴力と手を切るためには、指導者が選手自身から発せられることばを自己に迎え入れ、これによって目指すべき指導の理想を不断に問い直す必要があるのである。他者としての選手に対する指導者の倫理は、指導者が選手のことばを渴望する語りの関係に求められる。

注および引用・参考文献

- ¹⁾ 本稿では、体罰に見られるような指導者が選手に向けて行使する攻撃的現象を暴力とする。本稿が体罰ではなく暴力という語を用いる理由は、体罰にいかなる大義名分が付されていようと、これが紛れもない暴力だからである。また本稿では、スポーツ指導における体罰を、単なる「罰」や「逸脱現象」としての意味合いを超えた位置づけを有するものと見做している。この点も、本稿が体罰ではなく暴力という語を用いて議論を展開してゆく所以である。なお、本稿では後に暴力性という概念が登場する

が、これと暴力を分かち点が、暴力が具体的現象であるところに求められることをここでは示しておく。

- 2) 文部科学省『学校教育法(昭和二十二年三月二十九日法律第二十六号)』(URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317990.htm) 2018 年 12 月 18 日最終アクセス。
- 3) 久保正秋(1991) コーチの役割に関する一考察. スポーツ教育学研究. 11 (1), 34.
- 4) なおこの議論は、日本体育学会第 68 回大会浅田学術奨励賞・受賞記念講演報告にて著わされたものであり、カントの行為論を試験的に指導者の暴力問題へ応用した仮説的見解であることに配慮されたい。竹村は、この議論が「今後の考察課題の方向性を示すにとどまっている」と限定を付している。竹村瑞穂(2017) 競技スポーツの文脈における「よい」身体についての応用哲学的考察. 体育哲学年報. 48, 42-43.
- 5) 松田太希(2016) 運動部活動における体罰の意味論. 体育学研究. 61 (2), 407-420.
- 6) 高尾尚平(2018) 超越へ向けた暴力—スポーツの指導と暴力の交点—. 体育・スポーツ哲学研究. 40 (1), 35-52.
- 7) 同上論文, 46.
- 8) 坂本拓弥(2011) 運動部活動における身体性—体罰の継続性に着目して—. 体育・スポーツ哲学研究. 33 (2), 69.
- 9) ここでは、暴力の違法性や反道徳性が看過されるべきでないことを強調しておきたい。暴力の不当性は、われわれを暴力の克服に向かわしめる盤石な根拠である。本稿の問いは、暴力の不当性を前提に発せられているのである。
- 10) 高尾尚平(2018) 前掲論文, 46.
- 11) 関根正美(2015) 暴力容認の風土の解明 I. 体育学研究. 60 (Report), 2.
- 12) 和辻哲郎(2007) 人間の学としての倫理学.

岩波書店, p.17.

- 13) 丸山恭司(2005) 教育現場の暴力性と学習者の他者性. 岩波応用倫理学講義 6. 越智貢ほか(編集). 岩波書店. p.119.
- 14) 同上書, p.130.
- 15) 関根正美(2017) レヴィナスの倫理学が導き出すスポーツの倫理とは. 体育の科学. 67 (7), 486.
- 16) 同上論文, 486.
- 17) もっとも、運動部活動におけるスポーツ指導は、教育活動として解されるべき営みである。だが、運動部活動における暴力の背景に、勝利至上主義や競技志向といった要因が指摘される以上、そこには教育一般では語り尽くすことのできないスポーツ指導特有の問題が潜在している。指導者による暴力の問題は、スポーツ指導という特殊な文脈を加味して論じられるべき議題である。
- 18) 本稿では、以下の著作を中心にレヴィナスの思索を参照する。タイトルにある『全体性と無限』は、「暴力と倫理」を形容している。『全体性と無限』においては、他者との関係に存する暴力の根源が明かされ、これを乗り越えるための倫理的関係が示される。こうしたレヴィナスの著作は、本稿に対し有益な視座を提供するものになることが見込まれる。レヴィナス(熊野純彦訳)(2005) 全体性と無限(上). 岩波書店, pp.1-462. / レヴィナス(熊野純彦訳)(2006) 全体性と無限(下). 岩波書店, pp.1-353. Levinas, E. (1984) Totalité et Infini : Essai sur l'extériorité. Martinus Nijhoff, pp.1-284.
- 19) 熊野純彦(2006) 解説. レヴィナス(熊野純彦訳). 前掲書, pp.321-322.
- 20) レヴィナス(熊野純彦訳)(2005) 前掲書, p.15. Levinas, E. (1984) op.cit., p.X.
- 21) 同上書, p.68. ibid.p.16.
- 22) レヴィナスは、全体性について次のように論じる。「<他なるもの>が中立化されて、

主題あるいは対象となり、あらわれるということ、ことばを換えるなら明るみのなかに置かれること、これこそ<他>が<同>に還元されるということにほかならない。(中略) 存在者は自己を喪失して現象するその地平において、与えられ、把持されることで概念となるのである。認識するとはかくして、(中略) 存在からその他性を剥奪することに帰着してしまう」。レヴィナスによると、認識とは認識者の主観のもとに<他>を把持することであり、概念化は個々別々に存在する存在者を1つの中立項のうちに収容することである。レヴィナスの議論においては、認識や概念といったものが<同>とされ、この<同>のうちで個別の存在者を捕捉することが<他>を<同>に還元する全体性として位置づけられる。同上書、p.63. ibid.p.14.

- 23) なお、レヴィナスの著作において全体性は、暴力として指示されるものである。レヴィナスにとって暴力とは、理解や概念といったもののうちに<他>を包摂する所有である。そのため、レヴィナスの議論における暴力は抽象概念であり、体罰のような具体的暴力現象と次元を異にしている。ここでは、レヴィナスの議論における抽象概念としての暴力と、殴る・蹴るといった具体的レベルの暴力との位置関係を簡潔に示しておく。レヴィナスがいう全体性の暴力と殴る・蹴るといった暴力現象には密接な関係がある。両者の対応関係を整理すると、レヴィナスがいう全体性の暴力は、殴る・蹴るといった暴力現象そのものではなく、そうした暴力現象を誘発する前提に位置する(この点については、本稿の第3章にて詳述される)。本稿では、こうした対応関係を方法的に整序すべく、レヴィナスがいう抽象概念としての暴力については暴力性として記述し、殴る・蹴るといった具体的暴

力現象を暴力とする。

- 24) 佐藤真理人(1992)レヴィナス. 人間とは何か—西洋近代・現代の人間論. 谷口龍男・富永厚(編集). 北樹出版, p.212.
- 25) レヴィナスによると、「所有とは、<他>が私のものとなることで<同>と化する、際立った形式である」。レヴィナス(熊野純彦訳)(2005)前掲書, p.69. Levinas, E. (1984) op.cit.p.17.
- 26) A. シュッツによると、他者理解は「仲間の人間についての自己の生きられた経験の解釈」に基づいて行われる。アルフレッド・シュッツ(森川眞喜雄, 浜日出夫訳)(1980)現象学的社会学. 紀伊國屋書店, p.154.
- 27) 運動部活動においてフィールドワークを行った庄形の研究には、指導者が体罰の行使について回顧的に振り返った際の証言が記載されている。指導者は体罰について、「こいつを今は鍛えたいって思いながらするけど、わからせる方法がどんな方法かは状況に合わせて何かしらの意図を持ってやる」と述べている。庄形篤(2013)運動部活動における体罰受容のメカニズム—A 高等学校女子ハンドボール部の事例—。スポーツ人類学研究, 15, 111.
- 28) レヴィナス(熊野純彦訳)(2005)前掲書, p.62. Levinas, E. (1984) op.cit.p.13.
- 29) 同上書, p.39. ibid.p.3.
- 30) 同上書, p.52. ibid.p.9.
- 31) 小野文生(2002)教育哲学における他者解釈の技法の機制について—レヴィナスとブーバーの比較を通して。教育哲学研究, 85, 60.
- 32) レヴィナスによれば、他者は無限なものであることにおいて全体性の外部に位置することができる。「<無限なもの>の観念とは超越にほかならならず、適合する観念をあふれ出すものにほかならない。全体性が構成されえないのは、<無限なもの>が統

合されることがないからである。(中略)
 <他者>という<無限なもの>がそれを拒むのである」レヴィナスがいう他者の他者性は、自己と似通っていないことにおいて<他>となるのではない。この場合の他者性は、自己という<同>との適合の度合いによって測定される差異であり、あくまで<同>を尺度として認識されている。そうではなく、レヴィナスがいう他者の他者性は、自己と他者が共通の尺度によっては測り得ないことにおいて<他>とされるのであり、自己が有する物差しからは無限に隔てられていることにおいて<他>とされるのである。レヴィナス(熊野純彦訳)(2005)前掲書, p.148. Levinas, E. (1984) op.cit., p.52.

³³⁾ 同上書, p.76. Levinas, E. (1984) ibid., p.20.

³⁴⁾ エマニュエル・レヴィナス(合田正人訳)(1999)『全体性と無限』要約。レヴィナス・コレクション。合田正人(編訳)。筑摩書房, p.447.

³⁵⁾ レヴィナス(熊野純彦訳)(2005)前掲書, p.75. Levinas, E. (1984) op.cit., p.19.

³⁶⁾ エマニュエル・レヴィナス(西山雄二訳)(2010)倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話。筑摩書房, pp.115-117.

³⁷⁾ レヴィナス(熊野純彦訳)(2005)前掲書, p.106. Levinas, E. (1984) op.cit., p.33.

³⁸⁾ 同上書, pp.40-43. ibid., pp.3-5.

³⁹⁾ 松田太希(2016)前掲論文, 412.

⁴⁰⁾ 高尾尚平(2018)前掲論文, 44-45.

⁴¹⁾ ここでは、了解(理解)の暴力性に関するレヴィナスの主張を確認しておく。「了解(la compréhension)は存在者(l'étant)に暴力をふるい、存在者を否定する。暴力とは部分否定である。(中略)暴力という部分否定は、存在者の自存性(l'indépendance)を否定する。つまり、存在者は私の所有物となるのだ」。レヴィナスによると、他者を了解(理解)することは、他者の自存性を否定し他者を<同>うちで所有する暴力

性にほかならない。エマニュエル・レヴィナス(合田正人訳)(1999)存在論は根源的か。レヴィナス・コレクション。合田正人(編訳)。筑摩書房, p.359. Levinas, E. (1951) L'ontologie est-elle fondamentale ?. Revue de Métaphysique et de Morale. 56, 96.

⁴²⁾ 村本宗太郎(2016)運動部活動時の「体罰」判例に見る体罰の特徴とその要因に関する研究。日本スポーツ法学会年報. 23, 148.

⁴³⁾ 同上論文, 148.

⁴⁴⁾ ここでは、諸種の体罰事例に対する村本の考察も併せて抜粋しておきたい。村本は、体罰の発生に特徴的な傾向として「生徒との信頼関係に対する高い自己評価、指導者の立場の絶対的優位性及び、その優位性に起因した生徒に対する主観的判断、生徒に対し指導者の意向通り行動を求める態度が示唆された」と論じている。同上論文, 149.

⁴⁵⁾ 庄形篤(2013)前掲論文, 112.

⁴⁶⁾ 内山治樹(2013)コーチの本質。体育学研究. 58 (2), 691.

⁴⁷⁾ 同上論文, 684.

⁴⁸⁾ 佐藤臣彦(2014)コーチング概念の哲学的考究—[知の構造]の視点から—。身体運動文化研究. 19 (1), 12.

⁴⁹⁾ 坂本健三(1986)技術の発生と展開。新・岩波講座哲学8 技術 魔術 科学。大森荘蔵ほか(編)。岩波書店, p.7.

⁵⁰⁾ 松田太希(2016)スポーツ集団における選手間関係の暴力性—ルネ・ジラルの暴力論を手がかりに—。体育・スポーツ哲学研究. 38 (1), 26.

⁵¹⁾ 松田太希(2015)スポーツ集団における体罰温存の心的メカニズム—S.フロイトの集団心理学への着目から—。体育・スポーツ哲学研究. 37 (2), 92.

⁵²⁾ 同上論文, 92.

⁵³⁾ 松田は、指導者の自我理想と選手との関係性について次のように論じる。「指導者が

彼の自我理想を思い描くとき、それは選手との関係を見捨てることではない。選手に『ほれこまれる』ことがなければ、その自我理想は無意味である。選手たちに『ほれこまれ』てこそ『良い指導者』なのだから。同上論文、92。

- 54) 同上論文、93。
- 55) レヴィナス（熊野純彦訳）（2005）前掲書、p.79。Levinas, E. (1984) op.cit.,p.21.
- 56) 同上書、p.80。ibid.pp.21-22.
- 57) レヴィナス（熊野純彦訳）（2006）前掲書、p.51。ibid.p.177.
- 58) エマニュエル・レヴィナス（西山雄二訳）（2010）前掲書、p.107.
- 59) レヴィナス（熊野純彦訳）（2006）前掲書、p.43。Levinas, E. (1984) op.cit.,p.174.
- 60) 同上書、p.41。ibid.p.173.
- 61) エマニュエル・レヴィナス（西山雄二訳）（2010）前掲書、p.108.
- 62) レヴィナス（熊野純彦訳）（2005）前掲書、p.225。Levinas, E. (1984) op.cit.,p.89.
- 63) 「顔としての選手」という表現は、厳密にいうと不適切である。「選手」という以上、ある種の対象化が生じてしまっている。このことを自覚したうえで本稿では、顔や他者に関する議論に際して「選手」という表現を用いる。というのも、こうした対象化が行われなければ、文面のうえで選手なるものを論じる術を失うからである。この点は、顔に関するエクリチュールの限界であるといつてよい。
- 64) レヴィナス（熊野純彦訳）（2005）前掲書、p.117。Levinas, E. (1984) op.cit.,p.38.
- 65) 同上書、p.116。ibid.p.37.
- 66) 同上書、p.119。ibid.pp.38-39.
- 67) レヴィナス（熊野純彦訳）（2006）前掲書、p.249。Levinas, E. (1984) ibid.p.273.
- 68) 同上書、p.249。ibid.p.273.
- 69) レヴィナス（熊野純彦訳）（2005）前掲書、

pp.126-127。Levinas, E. (1984) ibid.p.42.

- 70) 同上書、p.81。ibid.p.22.
- 71) 同上書、p.125。ibid.p.41.
- 72) 同上書、p.139。ibid.p.48.
- 73) 同上書、pp.133-134。ibid.p.45.
- 74) 同上書、p.133。ibid.p.45.
- 75) もっとも、ことば（言語）もまた普遍化の所産として考えることができる。ことば（言語）は、事物を名指す記号として言語体系を前提としている。とはいえ、レヴィナスがこの点について無自覚だったわけではない。レヴィナスが記号作用としてのことば（言語）の性質を自覚していたことは、以下に付すテキストからうかがえる。そのうえでレヴィナスは、ことば（言語）の働きを、記号作用としてのみ限定すべきではないと主張しているのである。レヴィナスにとってことば（言語）は、記号作用として作動する以前に、他者を前提としている。詳しくは、以下を参照されたい。エマニュエル・レヴィナス（藤岡俊博訳）（2012）発話と沈黙。現代思想、40（3）、8-34.
- 76) レヴィナス（熊野純彦訳）（2005）前掲書、p.141。Levinas, E. (1984) op.cit.,p.49.
- 77) 同上書、pp.140-141。ibid.pp.48-49.
- 78) 同上書、p.134。ibid.p.45.
- 79) 本稿が示す倫理的関係の具体的な場面は、マイク・シャシェフスキー（以下、コーチ K）の著作のなかに見出される。コーチ K は、アメリカのデューク大学バスケットボール部のヘッドコーチを務める人物である。コーチ K は、自身の著作のなかで次のような出来事を回顧している。ある日の練習前にコーチ K は、選手たちを鼓舞すべくロッカールームにて15分にわたるミーティングを展開した。この段階でコーチ K 自身は、情熱的な練習を喚起する充実したスピーチであったと自負している。ところが練習は、コーチ K が理想としたものとは異なり、閑

散とした雰囲気で開催された。自身が予期したものとは異なる状況を前にして、実際にコーチ K は怒りを覚えたという。しかしながら、コーチ K は選手たちにミーティング内容を理解できたか尋ねるを試みる。当時のキャプテンであったシェーン・バティエーには、「いいえ、コーチ、ほとんど理解できませんでした」と返答される。そこでコーチ K は、バティエーのことばを迎え入れ、15 分間のスピーチの内容を 30 秒ほどにまとめあげることとした。加えてコーチ K は、「いつかまたこのようなことが起こったら、自分のメッセージが伝わら

なかったとすぐに教えてほしい」とバティエーに告げた。本稿が想定する倫理的関係は、このようなシーンに見て取ることができる。コーチ K のことばを借用すれば、『『あなたのメッセージは共感を呼び起こさなかった』と伝えることのできるコミュニケーションスタイル』が倫理的関係において求められるのである。マイク・シャシェフスキー、ジェイミー K・スパトラ（佐良土茂樹訳）（2011）コーチ K のバスケットボール勝利哲学。イースト・プレス、pp.71-74.

⁸⁰⁾ レヴィナス（熊野純彦訳）（2006）前掲書、p.33. Levinas, E. (1984) op.cit., p.169.

受付 2019 年 1 月 8 日

受理 2019 年 4 月 23 日